

【ハイチ大地震災害救援】

泌尿器科部副部長 光森 健二

ハイチ共和国で発生した地震(現地時間 2010 年 1 月 12 日 16 時 53 分)において、基礎保健緊急対応チーム(ERU)の一員として、1 月 26 日から 2 月 25 日までの 1 カ月間、活動を行いました。現地での活動内容を以下に報告します。

1 月 20 日に派遣要請が来てから、2 日間で手術予定の変更や外来患者の申し送りなどを行い、23 日には本社でブリーフィングを受け、24 日に出発。ニューヨーク、ドミニカ経由で 26 日に陸路でハイチに移動し、同日、ポルトープランスに滞在していた先発隊と合流しました。到着後の数日は赤十字連盟の basecamp が完成しておらず、連盟が借りた倉庫の敷地内に小型の蚊帳をはって、野宿で活動を開始しました。

【仮設診療所の活動】

限られた移動手段や情報が不十分な中、先発隊が現地の避難民キャンプの状況調査を行い、大きな避難民キャンプの隣にある日系自動車企業の敷地内に、診療所が 1 月 24 日に開設されました。一日の受診患者数は 60~100 人程で、地震による外傷は受診患者の 10~20%、多くは疥癬などの皮膚疾患や、頭痛・胃痛など不衛生な環境や地震によるストレスが原因と思われる軽症患者でした。しかし中には、呼吸器感染や下痢による脱水など、栄養状態や住環境が劣悪な場合は、容易に重症化する患者も含まれ、注意が必要でした。時には片言の現地語(クレオール語)を使うものの、基本は現地通訳を介して診療を行いました。

診療所の開設後 7 日目には現地看護師を、8 日目に現地医師の採用を開始し、徐々に診察は現地医師に移行して、我々は管理業務と外傷の処置に専念できるようになっていきました。外傷の特徴としては、震災直後、十分に創洗浄されないまま一次縫合されて起こった創感染や、落下したブロックなどで下肢の皮膚や指が欠損した症例などが多く、骨折は他施設ですでに応急処置してギブス固定されていました。そのため治療としては、デブリドメントや創洗浄が主体でした。中には

傷が大きく、皮膚移植が必要な症例があり、麻酔下による植皮術や小児のデブリメントを行いました。



また診療所での診察以外に、移動診療も行いました。赤十字以外にも、多くの支援団体が各避難民キャンプに診療

所を開設していましたが、小さなキャンプや崩れた家の軒先に住んでいる人たちは、医療支援を受けられないままになっているところもありました。フランス赤十字社と共同で避難民キャンプを訪問し、診療を行いました。

一方、首都から 35 キロ西方の震源地に近いレオガンという町で、日本の国際救援隊が開設した診療所を引き継ぎ、こちらでも最初から現地職員を採用して共同で診療に当たりました。私自身も 2 月 20 日からはレオガンに移動して、診療を行いました。急性期を過ぎて高血圧や糖尿病などの慢性疾患で受診する患者が増え、少数例ながらマラリアの発生などがみられ、治療薬の確保など対応が必要でした。

【予防接種キャンペーンの実施】

発災直後より、現在もなお 100 万人以上もの被災者が、避難民キャンプでの生活を余儀なくされています。そもそも最貧国の一つであるハイチでは、全国民の予防接種率が 50%前後と低く、人口の密集した環境下で仮に麻疹などの伝染病が流行すれば、大惨事が危惧されます。

そこでドイツ、フランス、カナダなど各国赤十字社と協力し、MR(はしか・風疹)や DPT(ジフテリア・百日咳・破傷風)などの混合ワクチンの接種を 1 日平均 1,000~3,000 人に実施しました。現在も、後続班が各キャンプを順に回り、活動を継続しています。南国ハイチは、連日 35℃を超える炎天下で、かなり体力を消耗しましたが、地元の赤十字ボランティア達も熱いなか、毎日頑張ってくれました。

【活動中の生活について】

今回は、赤十字連盟から各国赤十字社に ERU (緊急対応ユニット) の要請があり、日本から出動した基礎医療の対応以外に、野外病院、水・衛生供給、救援物資の配布、仮設住宅設営などのユニットが出動しました。各国から多数の人員が集まり、あっという間に 200 人を超えました。

当初は、倉庫の脇の空き地に各自でテントを張って野宿していましたが、これらの要員を支えるテント村が設営され、食堂での給食も始まり、トイレ・シャワー(お湯はできません)の数も増え、我々の生活環境は急速に改善しました。ただし、安全管理のため夜6時以降の外出はできず、基地と診療所、避難民キャンプを車で往復する毎日でした。夜間は、ミーティングや報告書の作成を行っているうちに消灯(10時)になり、早寝早起きの生活でした。しかし、事務管理要員は日報の作成や事務仕事で、発電機が止まった後も深夜まで仕事をしていました。

派遣前は、ニュースで配給の取り合いや倒壊した商店からの略奪、刑務所からの集団脱走などが報道され、治安に関してはかなり心配されました。実際ハイチに入ると、国連平和維持軍以外にも多くの治安部隊が武装して市内を巡回しており、軍用ヘリが飛び交い、殺伐とした雰囲気でした。しかし、基地周囲で窃盗団らしき



集団に威嚇射撃があったのと、いちど基地周囲でデモがあった以外は、あまり危険を感じることはありませんでした。避難民キャンプ内に入っても好意的に受け入れられて危険はありませんでしたが、水や食料の不足を訴えられたり、仕事を希望する人に度々話しかけられ、継続した支援と社会全体の復興の必要性をひしひしと感じました。